

蓬 左

HÔSA



卷1 本文冒頭

「春のながめ」表紙

大名家の儀礼

江戸時代の大名にとって、幕府をはじめ神社仏閣や大名家としての「しきたり」によって催される儀礼に参加することは重要な務めでした。これらの儀礼には、年頭の諸行事や五節句などの、定期的に繰り返される恒例行事のほか、数年もしくは数十年に一度行われる臨時の行事、大名個人が生涯を通じて経験する通過儀礼などがありました。大名はその家格や地位に応じて、それらの行事に参加し、主催しました。

徳川御三家の筆頭である尾張徳川家でも、大小さまざまな儀礼が行われました。数多く伝えられている儀式書からは、いかに大名や家臣が儀式を無事に執り行えるよう配慮したかがうかがわれます。また大名が行事に参加するとき身に着けた装束や祝膳に用いられた食器類、行事の様子を描いた絵画が残されています。今回の展示では、尾張徳川家で行われた儀礼のすがたを、正月行事を中心に紹介します。平成二十年は十二支の一番である子年にあたります。新たな年を、蓬左文庫の展示とともに迎え下さい。



あさぎ ちあおいもんつき ひしがた こもん かみしも こん ち あおいもんつき の し め
浅葱地葵紋付菱形小紋袴・紺地葵紋付熨斗目
徳川慶勝着用 徳川美術館蔵

袴は江戸時代の武士の礼服のひとつである。ただし将軍や大名などの上級武士にとっては略礼服であった。正式には肩衣に長袴をはく「長袴」を着用したが、長袴の裾を足の長さに短くした半袴に替え、長袴の略式服として用いた。十四代慶勝が着用した。



そうびうちやうてい の れい
宗廟朝廷之礼 徳川慶勝筆

年頭の諸行事や五節供といった公式行事や家督相続の御礼・将軍の偏諱を賜る御一字拝領などの儀式に際して、江戸城の大広間・黒書院・白書院などにおける席次をはじめ、尾張家当主のとりべき作法を行事ごとに図示している。十四代慶勝が自ら作成し、携帯できる大きさとなっている。

あおいもん ちらし まき え かけばん わん
葵紋散蒔絵懸盤・椀 徳川美術館蔵

懸盤とは四脚で四周に畳擦をめぐらせた形式の食膳である。平安時代からの例があるが、現存するのは江戸時代以降の作が中心である。膳椀の格式からは、最高位の白木の高脚折敷に次ぐ。懸盤は漆塗りで、蒔絵や金銀などで飾られ、本・二・三之膳を一組として豪華に揃えられた。



尾張藩士の世界

系図と分限帳

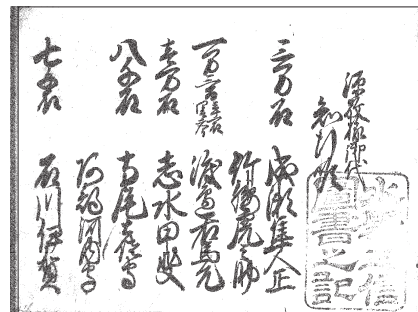
系図は、氏族や家族の血縁関係を書きあらわしたもので、系譜ともいわれています。古代の文章で書き記した文章系図から、やがて系線で親子・兄弟関係を図示する系図があらわれ、中世以降の系図の一般的な形式となり、現在にも引き継がれています。中世の武家においても系図の作成は盛んでした。

近世では、江戸幕府が寛永・貞享・寛政と三度にわたって大名・旗本から家譜・系図を書き上げさせ、『寛永諸家系図伝』（一六四三年成立）、『寛政重修



江戸・明治時代
藩士名寄

藩士諸家から提出された家譜、勤書が家別に綴込んである。



江戸時代
源敬様御代分限帳

初代徳川義直の時代の分限で、禄高の多い順（知行順）に配列されている。

諸家譜』（一八二二年成立）を編集しました。

尾張藩でも、初代徳川義直（一六〇〇～五〇）は、幕府の『寛永諸家系図伝』編集に影響をうけて、尾張藩士の系譜集の編集を命じており、八代宗勝（一七〇五～六二）の代に松平君山によって『士林派洄』（二七四七年成立）が完成しました。さらに、幕府の『寛政重修諸家譜』編集と同じ頃に、藩士諸家から家譜、勤書（履歴書）を提出させて「藩士名寄」の編集が始まり、廃藩の明治四年（一八七二）まで続けられました。尾張藩士の系図では、先祖の藩への功績が重視されて記されています。

* * *

分限帳は、近世の各藩の藩士たちの名前、禄高、地位などを記載した帳簿です。侍帳、家中帳などともよばれます。

各藩は、藩主を指揮官とする軍団という性格を本来もっていましたから、分限帳も藩主指揮下の部

隊編成の名簿という特性が、江戸時代でも早い時期ほど強く表れています。徳川家康の四男で、関ヶ原戦後に尾張清須城主となった松平忠吉（一五八〇～一六〇七）の分限帳では、家臣たちが部隊（組）ごとに記載されています。

慶長十二年の松平忠吉の病死により、弟の九男徳川義直が甲府城主から移って尾張藩が成立します。各時期に作成された尾張藩の分限帳をみていくと、部隊編成の帳簿的な性格が、平和が長く続くことで薄れ、職員録的な役割が強くなってきたことがうかがえます。ことに、検索に便利な「いろは」別の分限帳が江戸時代後期に多く作成され、藩士の名前、禄高、役職のほかに屋敷（住所）、菩提寺などが記載されるようになりました。

* * *

蓬左文庫、名古屋博物館に所蔵された系図や分限帳から、藩士たちの血縁関係や役職を介したつながりをさぐります。

源氏物語の世界

源氏物語にまつわる、絵画、書籍、工芸品など、その成立以来さまざまなかたちで享受されてきた『源氏物語』の世界を紹介します。（展示室1でコーナー展示）

徳川美術館は、年末年始および空調工事のため平成十九年十二月十日より同二十年一月三十一日まで臨時休館いたします。

姫君の装い

江戸時代の武家社会では、上下関係を明確に示すために、厳格な服飾制度が敷かれていました。大名家の姫君も例外ではなく、季節や日時、年齢、未婚・既婚により、その装いは衣服・髪型にいたるまで、細かな決め事に左右されていました。

將軍家に次ぐ家格を誇った尾張徳川家では、將軍家に準じた服制が整えられていたと考えられます。例えば藩主夫人の正装は、正月三が日には桂袴姿、冬の五節句や式日には光沢のある綸子^{りんす}の打掛^{うちかけ}姿、夏には絹縮^{きんしゆく}の小袖や麻の帷子^{かたびら}に付帯^{つけひ}を結び、さらにその帯先に腰巻^{こし巻き}の袖を通す腰巻姿でした。この正装は奥女中の挨拶を受ける「惣触れ」がある午前中のみです。午後には髪型も着物も改めるため、着替えが一日に四～五度にもおよんだといえます。また、姫君たちの小袖は、そのデザインによっても、着るべき日時が定められていました。現存する小袖やデザイン帳である「小袖雛形」からは、制約が多い中にも品格を失わず、かつ美しく見えるようにと工夫を凝らした姫君たちの並々ならぬこだわりをうかがうことができます。

武家女性の服飾にまつわる史料とともに、小袖や装身具、化粧道具など展示し、その華麗なる世界を紹介します。



きしゅうとくがわけ ごれんじゅうこそでひながた
紀州徳川家御簾中小袖雛形

紀州徳川家の御簾中すなわち藩主夫人が、五節句や式日などの正装時に着る打掛の雛形。白・赤・黒いずれかの綸子地に、「結花」とよばれる花束と幾何学文様で埋め尽くしたデザインが特徴である。



しろちりめんじ ごしょよきもんこそで ていとくいんかねひめ よしかつ
白縮緬地御所解文小袖 貞徳院矩姫(尾張家十四代慶勝夫人)着用

上部は春の桜、下部は咲き乱れる菊の中に団扇が置かれた意匠の縮緬地の小袖。下部は謡曲「菊慈童」をあらわしている。このように古典文学や謡曲を題材にした意匠を「御所解文様」といい、武家女性の小袖に典型的な意匠だった。



くろじちゅうもんはせい
黒地蝶文筥迫

筥迫は、武家の女性が外出時や礼装時に、懐紙や鏡、楊枝挿しなどを挟み込んで携帯する小物入れである。將軍家の御台所や正室は、胸元には入れず、普段は鼻紙台の上に置き、外出時には駕籠の中へ置いたという。

大名屋敷

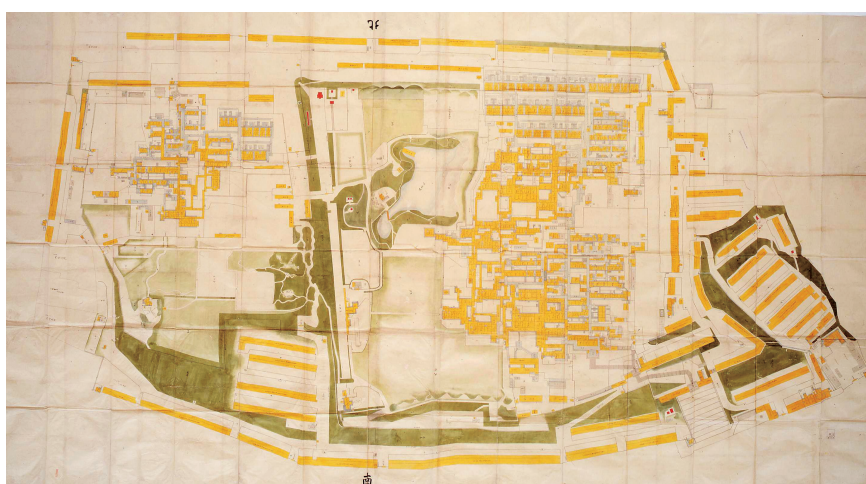


おしろおにわえず
御城御庭絵図 江戸時代後期

名古屋城二の丸北庭の大絵図。樹木や踏み石の一つ一つまで詳細に描かれている。

城持ち大名の多くは、城内に設けた大規模な屋敷建築群に住み、政務をおこなっていました。また大名には江戸参勤の義務があったために、江戸にも複数の広大な屋敷を構えていました。しかし江戸幕府の崩壊後、天守をはじめとする城の軍事施設の建築同様、日本中にあった大名屋敷は無用のものとなり、そのほとんどが破壊されました。

江戸幕府下の大名の、屋敷地・屋敷群・庭園からなる壮大な日常生活空間をご紹介します。



いちがやおやしきのす
市谷御屋敷之図 文政8年(1825)

江戸の市谷(現在の新宿区)にあった尾張藩上屋敷の大絵図。江戸における尾張藩の政務の中枢であり、かつ藩主以下使用人にいたる居住区であった。総坪数約7万8千坪という巨大な屋敷である。

春日井郡上野村の下方氏

尾張藩が編集した藩士の系譜集『士林沂洄』^{しりんそかい}には、元禄六年（一六九三）以前に尾張藩に仕えた、おむね御目見以上（規式以上）の、八八四家（すでに断絶した一二一家を含む）の系譜が記載されています。藩士諸家から提出させた家伝をもとに、編者松平君山が漢文で要約したとされていますが、もとの家伝の面影をとどめている系譜もあります。下方氏の系譜も、二代左馬允貞経（一五四二年没）・三代左近貞清（一五二七〜一六〇六）の記事は、まるで物語のように展開しており、下方家から提出された家伝の特徴を伝えているように思います。

『士林沂洄』によれば、尾張藩士下方氏は、清和源氏小笠原次郎長清の子孫、弥三郎貞利が下方氏を称して信濃伊那郡飯山城主となったと伝えられます。その子貞経は、大永年中（一五二二〜二七）尾張国春日井郡上野村（鍋屋上野村、現在名古屋市中心部）に移り住んだといわれます。貞経は、岩倉城主織田伊勢守家に仕えたとも、清須城主織田大和守家に仕えたとも両様の説があります。当時上野村あたりは、岩倉・清須両勢力の境界上でどちらとも判断が困難です。ついで、天文七年（一五三八）貞経は織田信秀に仕えることになったという『士林沂洄』の記事は注目されます。

市岡惣次郎主 貞経 志右衛門 左馬允 大永年中来尾州住春日井郡上野邑岡士松井天野次井堀尾佐久間河野川方津田織田長谷川日蓮石黒等三十六人其一也近郷属織田伊勢守信安信寧出	奔織田陣正忠信秀奉教百騎攻上野下方角右衛門与信秀挑戰于田時抱信秀既欲執首信秀兵援衆擊角右衛門信秀先死此時下方一族三十余人戰死貞経不能守城降信秀天文十年丑二月十六日卒 或曰仕織田大和守教信領六百貫教信卒後天文七年戌仕織田陣正忠信秀遠州稻葉山夜合戰時属織田与次郎信康
--	--

士林沂洄 卷63

織田信秀の那古野攻略と下方氏

天文七年（一五三八）は、尾張国海東郡勝幡城主織田信秀（織田信長の父）が、今川那古野家の今川氏豊から那古野城を奪取したと推定される年代です。『名古屋合戦記』によれば、天文元年（一五三二）

に今川氏豊との連歌を口実に那古野城内に宿泊中だった織田信秀が、夜中に城内外から火を放つて攻め立てたので、氏豊は降参して京都に逃れたといわれます。しかし、旧来の天文元年説は誤りで、那古野城下で戦火に焼かれた天王社などが天文八年に再建されたという伝承を根拠に、新井喜久夫氏がその前年天文七年とされた説が、他の関係史料からみても妥当と考えます。

織田信秀は、もともとの領地である尾張西部に加えて、今川那古野家の領地であった尾張東南部も獲得し、勝幡城から那古野城に本拠を移しました。下方貞経は、尾張東部の多くの武士たちと同様に、この地域に勢力を伸ばしてきた信秀に仕えることになった可能性が大きいと思います。

もちろん、『士林沂洄』の記事のもとになった、下方氏の家伝は江戸時代に入ってからまとめられたものでしょうし、その内容についても下方貞経が岩倉・清須どちらに仕えたか明確でないなどあいまいなところがあります。しかし、『名古屋合戦記』も江戸時代に入ってからまとめられた合戦記ですから、下方氏の家伝の記事を検討してみる価値は十分にあると思います。家伝や系譜は、後世の改変がされやすく、史料として十分には信頼しがたいとされますが、逆に史実を明らかにするための貴重な手がかりを残している可能性もあるのです。

古地図データベースの「案内」

蓬左文庫では、尾張徳川家に伝えられた二千枚を超える絵図を所蔵しています。

その内容は、名古屋の城下図から、日本各地の国絵図、世界図、城郭図、庭園図など、さまざま多岐にわたっています。

それら所蔵する主な古地図（一部徳川美術館、徳川林政史研究所、名古屋博物館蔵を含む）をカラーポジフィルムで撮影し、高精細画像でデジタル化したものが「古地図データベース」です。



「文字情報データベース」の画面

その数は、新館開館時より約四倍に増え、およそ千七百枚に上ります。

機能も「全画像の表示」、「比較表示」、「文字情報データベース」に加え、「現在の名古屋との比較」が増えました。

「全画像の表示」では、地域図、尾張資料、城郭・兵事、庭園・屋敷などの分類リストから、古絵図資料を選んで見ていただけます。現在、地図名からの検索はできませんが、資料の検索機で資料番号を調べ、番号順になっている全画像資料リスト（操作ガイドに付いています。）からどの分類に入っているか、を捜していただくことはできます。

「比較表示」では、二画面に画像をふたつ表示して、比較できるようになっています。

「文字情報データベース」は、古地図上の文字を判読したデータベースで、文字情報（町名、通名、寺社名、村名、藩士名など）を選択して、古地図上の該当場所を見ることが出来ます。（但し対象の古地図は十五点のみです。）

「現在の名古屋との比較」では、「名古屋城下絵図」（二七〇〇年頃 徳川美術館蔵）と「尾府名古屋図」（二七四年 蓬左文庫蔵）の二図それぞれと現在の名古屋の概略図とを比較できます。

すべての画像表示画面で、拡大・縮小ができ、また、左右上下に動かしたり、回転させたりもできますので実際の絵図を肉眼でみるより、細かいところもはっきり見えます。



「現在の名古屋との比較」の画面

この「古地図データベース」は、無料スペースの閲覧室にて「熟覧票」にご記入の上、ご利用いただけます。（利用料は無料です。）

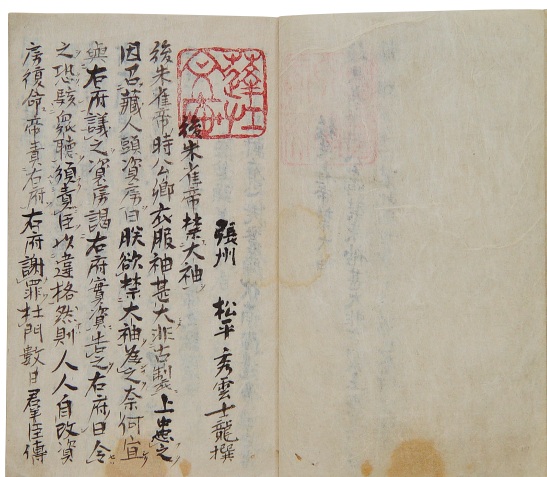
「現在の名古屋との比較」機能だけは、蓬左文庫展示室ガイダンスホールにあります「デジタル御文庫」（タッチパネル式）でご覧いただけますが、このようにさまざまな機能があり、たくさん絵図を見ることが出来ますので、是非、閲覧室までお越しください。

表紙の「春のながめ」は、尾張藩士の系譜集である『士林派廻』（三頁参照）の編者として有名な松平君山（くんざい）（一六九七～一七八三）による、和文の随筆。

著者松平君山は、尾張藩士千村作左衛門秀信の子として生まれ、母は堀忘斎の三女で堀杏庵の孫に当たる。名は秀雲で、通称は太郎左衛門、君山は号である。尾張藩士松平九兵衛久忠の養子となった。享保九年（一七二四）に養父の死去により家督を継ぎ、家禄二五〇石、馬廻となった。学者としての評価を得た君山は、寛保三年（一七四三）に書物奉行に任命された。ついで、八代尾張藩主徳川宗勝の命により、『士林派廻』『張州府志』編纂の責任者となって、完成させた。宝暦二年（一七五二）には、その功により五〇石を加増され、家禄三〇〇石となった。天明元年（一七八二）に隠居し、八十七才で亡くなった。

されている。

若くして漢詩を作った松平君山には、漢文による随筆、「吏隠亭漫録」（八頁写真参照、同目録番号二一五七）がある。「後朱雀帝禁大袖」「小野道風書額」など、歴史人物の逸話一四を記載している。なお、「吏隠亭」は、君山の書庫名であり、自身の号でもある。両書からも、君山の博識な学識ぶりがうかがえよう。



「吏隠亭漫録」本文冒頭

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> <蔵書検索もできます。>

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

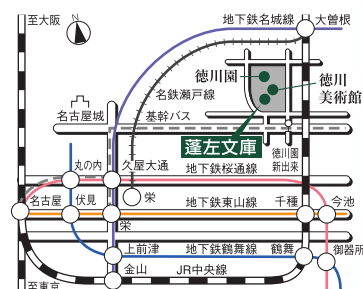
- 【市バス】名古屋駅バスターミナル(ターミナル2F)グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分
- 【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分
- 【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分
- 【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

- 【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。



ご利用案内

- 休館日／月曜日(祝日のときは直後の平日) 3月3日(月)は臨時開館します。12月中旬～1月3日 ※催事により変更することがあります。
- 展示室／有料 一般:1200円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)
【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)
- 閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第75号 ☆平成20年1月4日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫 ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:菱源(株)
※この冊子は再生紙(古紙配合率100%、白色度80%)を使用しています。